

パネル討論Ⅱ：男女の違いと科学・技術

司会：水村和枝（中部大学）・宮坂京子（東京家政大学）

1. 脳の2つの性 — セックスとジェンダー —

横浜市立大学名誉教授 貴邑富久子

私は、脳を、「古い脳」と「新しい脳」の2つに分けて考えると、脳の性差として言及されているさまざまな知見や通説を矛盾なく整理したり、信憑性を評価したりすることができると考えている。

古い脳というのは、視床下部、扁桃体、そして中脳、橋、延髄を含む脳幹という脳部分、新しい脳は、新皮質と海馬という脳部分から成る。古い脳の構造には、生まれる前に性分化がおこって、本能、情動などの機能に性差ができる。そのため、この脳部が担当する個体維持や種族保存のためのさまざまな行動、例えば食行動、性行動、攻撃行動などには明らかに性差がある。しかし、新しい脳には、生まれる前に構造の性分化がおこるといふ確かな証拠はなく、誕生時には、男の子、女の子の新しい脳の機能には違いがないとされている。もし、新しい脳が司る認知機能やそれに基づく思考や意志的な行動に性差があるとすれば、それは生後、養育、教育、そして社会などからもたらされる環境刺激に性差があり、そのため神経回路に性差ができるからだ。こう考えると、古い脳には、生物学的性＝セックスがあり、新しい脳

には、社会的／文化的性＝ジェンダーがあるということができる。

本講演では、男性優位な社会は古い脳のセックスに基づいてつくられたが、ジェンダーは男性優位社会を維持するために新しい脳によってつくられ、継承されてきた、という私の仮説をお話したい。とくに新しい脳に生まれつきの性差がなく、生後の環境刺激の如何によって男女の脳の違いができるという仮説は、近年のフランスのカトリーヌ／ヴィダルとドロテ／ブロワ＝ブロウエズが書いた「脳と性と能力」（集英社、2007年）の考えと一致しているものである。

一方では、現在の日本の科学界においては、とくに男性科学者の新しい脳に築かれたジェンダーに基づく思考の頑迷さが、脳の性差に関する研究を正しく評価していないことを示す幾つもの事例がある。それについても私の一経験をお話しし、アメリカのロンダ／シービンガーが書いたような「ジェンダーは科学を変える！」（工作舎、2002年）という世界が未だ続いていることを憂えたい。

田中-貴邑富久子氏プロフィール



医学博士、横浜市立大学名誉教授。

1964年横浜市立大学医学部卒業、69年同大学院医学研究科修了、85年同教授。その後、同医学部長。横浜市立大学退職後は、国際医療福祉大学小田原保険医学部長を経て、現在は、女性の更年期医療に携わっている。

日本生理学会、日本神経科学学会、日本内分泌学会、日本神経内分泌学会、日本生殖内分泌学会などで理事、幹事、監事、会長を務める。日本性差医学／医療学会、日本女性医学学会、更年期と加齢のヘルスケア学会などの会員。専門は生理学、神経内分泌学、脳科学。ブレインサイエンス振興財団常務理事。

著書に「女の脳／男の脳」（NHK ブックス）、「脳の進化学」（中公新書ラクレ）、「がんで男は女の2倍死ぬ」（朝日新書）、「女の老い／男の老い」（NHK ブックス）他。共著に「性差とは何か」（日本学術協力財団）、翻訳書に「性差医学入門」（じほう）。